

アスペルガー障害の特性への気づきが対象者のコミュニケーションと 対人関係についての思考の変化に繋がった一事例

苦田仁^{1)*} 寺脇恭子¹⁾ 岸本千春¹⁾ 森本温子¹⁾ 小乾みどり¹⁾ 住吉崇史¹⁾ 高間さとみ²⁾

1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 10 病棟

2) 鳥取大学大学院医学系研究科保健学専攻医学部保健学科

地域・精神看護学講座

Case study: Improved communication and interpersonal relationships by understanding the traits of Asperger's syndrome included in the patient originally diagnosed as schizophrenia

Hitoshi Nigata^{1)*}, Kyoko Terawaki¹⁾, Chiharu Kishimoto¹⁾, Atsuko Morimoto¹⁾, Midori Koinui¹⁾,
Takashi Sumiyoshi¹⁾, Satomi Takama²⁾

1) The 10th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

2) Nursing Care Environment and Mental Health, Major in Nursing,
School of Health Sciences, Tottori University Faculty of Medicine

*Correspondence: byoutou9@tottori-iryu.hosp.go.jp

要旨

A 氏は、統合失調症として入院した。幻覚、妄想といった陽性症状は目立たなかったが、自己中心的な言動、他者が理解し難い解釈や表現を使う為、他者と適切な関わりが出来ないという問題を抱えていた。また、思い通りにいかない事で、治療プログラムを拒否する事や、看護師に対し攻撃的となる事が続いた。鑑定入院では、それらの特徴は統合失調症の思考形式障害と診断されていた。これに基づいた薬物療法やガイドラインに沿った治療プログラムでは、上記諸症状の改善は認められなかった。多職種チーム (MDT) は、A 氏との関わりを通し、その特性は自閉症スペクトラムの特性ではないかと疑問を持つようになった。そこで、A 氏が理解し受け入れる事が出来る方法を検討し、約束事や社会のルールの説明し、A 氏の特性を考慮した医療観察法の個別治療プログラムを実施した。今回、A 氏の経過、及び MDT の関わりについて時系列シートを作成し、A 氏のコミュニケーションスキルの向上と、対人関係に関する思考の変化に対し有用であった視点を検討した。その結果、1. 信頼関係の構築、2. 視覚化と構造化、3. 失敗体験の活用、4. 共感性と相互性、の 4 つの視点が有用であったと結論付けた。鳥取臨床科学 8(2), 142-148, 2017

Abstract

A patient A was hospitalized for schizophrenia. Although positive symptoms such as visual hallucinations or delusions were not very remarkable, he was noted for problems such as self-centered behaviors, making interpretations or expressions that were incomprehensible to others, and could not have appropriate interactions

with others. When he was frustrated by something against his will, he repeatedly refused the treatment programs or turned aggressive towards nurses. During the hospitalization for assessment, these characteristics were regarded as a disordered formal thought characteristic of schizophrenia. However, drug therapies or treatment programs according to guidelines for schizophrenia did not improve the above symptoms. Through interacting with the patient A, a multi-disciplinary team (MDT) began to suspect that these might be traits of autism spectrum disorders. They considered methods that the patient A would be able to understand and accept, explained to him the importance of rules or commitments and social rules, and took his characteristics of autism spectrum disorder traits into consideration to implement a treatment program under the Medical Treatment and Supervision Act. We created a chronological sheet indicated his progress and interactions with the MDT and noted that it effectively improved his communication skills and modified his thinking in interpersonal relationships. From these results, we concluded the program was effective in the four respects of 1. constructing a relationship of trust, 2. visualization and structuralization, 3. taking advantage of past errors, and 4. empathy and mutuality. *Tottori J. Clin. Res.* 8(2), 142-148, 2017

Key Words: 医療観察法, 多職種チーム, 対人関係, アスペルガー障害, コミュニケーションスキル; Medical Treatment and Supervision Act (MTSA), multi-disciplinary team (MDT), interpersonal relationships, Asperger's syndrome, communication skills

はじめに

医療観察法指定入院では、心神喪失の状態で大変な他害行為を行った者（以下、対象者）に対し、医師、看護師、作業療法士、心理療法士、精神保健福祉士の5職種からなる多職種チーム Multi Disciplinary Team（以下、MDT）を組み、対象者への治療を提供する。

A氏は、統合失調症として入院となったが、入院時より幻覚・妄想といった陽性症状は目立たなかった。一方、時間や物事に対する強いこだわり、自己中心的な思考、場違いな言動があり、他者との適切な関わりが出来ないといった対人関係の問題を抱えていた。鑑定入院では、このような特徴は統合失調症の思考形式障害と診断されていた。

対象行為に対しても、「なぜ自分だけが罰を受ける？家族も悪い。」と訴え続けていた。また、思い通りにいかないと、治療プログラムを拒否する事や、看護師の関わりに対しても拒否的となるという事が続いた。この診断に基づいた薬物療法やガイドラインに沿った治療プログラムでは、A氏の諸症状の改善は認められなかった。

自閉症スペクトラムの特性は、統合失調症、人格障害、神経症等と間違われやすい。MDTでは、A氏との関わりを通し、A氏の特性は統合失

調症の思考形式障害ではなく、自閉症スペクトラムの特性ではないかと疑問を持つようになった。そこで、A氏が理解し受け入れる事が出来る方法をMDTで検討し、約束事や社会のルールの説明、A氏の特性を考慮した医療観察法の個別治療プログラムを実施するとともに、定期的に看護面接を行うなど、看護師が日々の関わりを通して対人関係へのアプローチを続けた。その結果、自発的に他者と過ごす時間が増え、約束事や社会のルールに理解を示すようになった。また、対象行為に対する考え方にも変化がみられた。今回、A氏のコミュニケーションスキルの向上と対人関係に関する思考の変化について振り返り、どのような関わりが有用であったのかを検討した。

I. 研究目的

社会性に問題を抱えるA氏に対する看護師の関わりを振り返り、A氏のコミュニケーションスキルの向上と対人関係に関する思考の変化について有用であった関わりの視点を明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究対象